

# ミハイル・ショーロホフ『静かなドン』におけるコサック

## ——その主体化と解体——

平松 潤奈

### 1. 二重の叙事詩

ショーロホフの長編小説『静かなドン』（1928-1940）は、社会主義リアリズムの古典とみなされる一方で、そこから完全に除外される作品でもある。ソヴィエト社会主義リアリズム文学を包括的に論じ作家としても知られるレジヌ・ロバンは、幼い頃、社会主義リアリズム文学に熱中していた。しかし「ただ一人だけ私にとって問題となる主人公がいた。『静かなドン』のグリゴリー・メレホフである」。なぜならグリゴリーは赤軍に入って立派な大義のために闘う肯定的主人公ではないからだ。「古代の形式を反復する傑作でありつつ、肯定的主人公も『新しい人間』もない […] 『静かなドン』は、この文学生産〔社会主義リアリズム〕における謎、例外として残る。」<sup>1</sup>。

『静かなドン』はしばしば叙事詩的作品だと言われる。ロバンはそれを「古代の形式」、「現代の『オデュッセイア』」と呼ぶ。この小説で中心的に語られるのは、第一次世界大戦・革命・内戦という紛乱の時代を通過するコサック集団の生活であり、それはジェルジ・ルカーチによる叙事詩の定義によくあてはまっているようだ。小説中のコサックの世界は「それ自体において完結した生の総体性を形象化」しており、コサックの主人公たちは、自らの属する共同体、あるいはドンの地の自然と一体になり、「ひとつの共同体の運命」をそのまま体现する。<sup>2</sup>

しかし「古代の形式を反復する」と形容することによって、ロバンはコサックについての神話的な物語の反復だけを念頭に置いているわけではない。すでに定説となっていることだが、社会主義リアリズム小説もまた、叙事詩的なものなのである。社会主義リアリズム論の第一人者カテリーナ・クラークがミハイル・バフチンに則って説明しているように、社会主義リアリズムの物語世界は完結して閉じた価値体系をもった叙事詩的形式において展開されるのであり、そこには近代小説にあるような人間の内面と外部との葛藤は存在し

<sup>1</sup> Régine Robin, *Socialist Realism: An Impossible Aesthetic*. Trans. Catherine Porter (Stanford: Stanford UP, 1992), pp. xvi, 241. [ ] 内は平松。以下同様。

<sup>2</sup> ジェルジ・ルカーチ『小説の理論』原田義人・佐々木基一訳、ちくま学芸文庫、1994年、64, 74頁。Robin, *op. cit.*, p. 239.

ない。<sup>3</sup>

こうしたことから、『静かなドン』は社会主義リアリズム叙事詩とコサック叙事詩という二重の叙事詩的枠組みに規定されているのだと言えるかもしれない。ロバンの提示した「謎」に対する答えは一つではないだろうし、確実な答えが見つかるわけでもないだろうが、本稿では、コサックにまつわる二重の叙事詩というこの小説のもつ特殊性が「例外」を成立させる一要因になっているのではないかと仮定して、社会主義リアリズム小説の振れ幅を読みとってみたい。そのために、コサック叙事詩の根幹となっている内戦期の「実際の」コサック史（それも一つの物語であることを逃れえないが）を素描しながら、それが小説テキストにおいてどのように語られているのかを考察していく。

## 2. 革命期におけるコサック・ナラティヴの広まり

周知のように、コサックとはもともとは逃亡した農民や都市民がモスクワ公国やポーランドの辺境に形成した自治的な集団であるが、17世紀末あたりから皇帝権力によって徐々にその自治を奪われていき、19世紀には完全にロシア帝国の統治システムに組み込まれていたとされる。しかし1917年の2月革命で帝政が崩壊し、コサックはツァーリ体制の一環としての社会的地位を失った。それとともに非常に短期間のうちにコサック・ナショナリズムが高揚し、コサック自治への動きが活発化していく。『静かなドン』で描かれるドン・コサックに関して言えば、ピョートル大帝の治世以来開かれていなかったコサック総会 *кырг* が200年ぶりに再開され、コサックの頭目アタマンは、ツァーリの任命によるのではなく総会によって選出されるという自治制度も復活する。

ドン地方にはもちろんコサックだけが居住していたわけではなく、非コサック住民が半数以上を占めており、臨時政府のもとでは、コサック／非コサックにかかわらない一般大衆の政治参加形態の組織化が促された。しかし革命以前にロシア皇帝に従属していたコサック軍団は、総会を機に自らをドン軍団政府と名乗って、武力を背景にコサックの自治独立へと動きだし、一般的な行政組織（ドン執行委員会など）からのコサックの分離を進める一方で、コサックに限らない住民全体に及ぶ行政権を行使していく。<sup>4</sup>

このように革命期のドン地方では、コサック・アイデンティティを強調する政治的・社会的な動きが急激に顕著になっていくが、だからといってコサック集団は決して一枚岩的な存在として自己主張をしていたわけではなく、「コサック」という単一のアイデンティ

---

<sup>3</sup> Katerina Clark, *The Soviet Novel: History as Ritual*, 3rd ed. (Bloomington: Indiana UP, 2000 (Originally 1981)), pp. 37-41. 社会主義リアリズムがその名称からして仮にも「リアリズム」であり、「現実はどうのようなものなのか」という問いに開かれているとしても、クラークによれば、このリアリズムのモードは、「現実はどうあるべきなのか」というユートピア的かつ叙事詩的なモードに完全に従属する。

<sup>4</sup> Peter Holquist, *Making War, Forging Revolution: Russia's Continuum of Crisis, 1914-1921* (Cambridge, MA: Harvard UP, 2002), pp. 51-94.

ティは、諸々の政治的立場が押し進めたレトリック、歴史家の言葉を使うならば「コサック・ナラティヴ」<sup>5</sup>の産物にすぎなかった（上述のようなコサック軍団政府への同一化を求めたのは、もちろんコサック社会の支配層である）。実際、階層分化や南北による地域格差の拡大、そして第一次世界大戦に出征中の若年世代と家に残った老年世代との政治的対立など、この時期のコサック社会には多くの亀裂が走っていた。しかしコサック社会における異なる階層において、それぞれ異なったかたちではあれ、「コサックであること」が何らかの政治的・社会的要求が生じるときの梃子となって働きはじめ、それがコサックたち自身のみならずコサック外部からも認知され、実効力をもっていったことは重要である。帝政の崩壊によって、それまで明確であったコサックの法的地位が突然消失し、分裂した状況が剥き出しになったからこそ、コサック・アイデンティティを統合力として求める動きが必要とされたのだ。

しかしコサックの古い制度が復活したとはいえ、コサック・ナショナリズムのイデオロギーは困難な状況にあった。ピーター・ケネスが述べているように、「結局コサックは独立した言語と独自の文化をもった民族ではなく、単なる特権的な利益集団にすぎなかった。コサックたちは何世紀にもわたって彼らが分離していたことを強調する歴史を必要とし、さらにはロシア人民との関係性をはっきりさせるような自分たちの『ナショナルリティ』の定義を必要としていたのだ」<sup>6</sup>。

### 3. コサック大衆の主体化？

『静かなドン』のテキストは、一面ではまさにこのような革命期のコサック・アイデンティティの問題を扱っている。小説でも、コサック集団、そしてとりわけ主人公グリゴリーがどのようにコサックへと主体化していくかが語られるが、ここでも主体化の物語は、それを物語ることの困難、つまりコサックを「コサックらしく」あるいは「コサックであることに自覚的なコサックとして」提示することの困難を示しているように見受けられる。<sup>7</sup>

コサックをコサックらしく描くということは、ある意味では単純なことのようでもある。文化が生み出してきたステレオタイプに則ったコサック像を踏襲すればよいのだ。勇敢に闘い、略奪や暴行を繰り返し、無分別や残虐さを発揮するという典型的なコサック・イメージの再生産は、『静かなドン』においても行われている。しかしそれはほとんどこれまでの

---

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 61.

<sup>6</sup> Peter Kenez, "The Ideology of the Don Cossacks in the Civil War," in R.C. Elwood ed., *Russian and Eastern European History: Selected Papers from the Second World Congress for Soviet and East European Studies* (Berkeley: Berkeley Slavic Specialties, 1984), p. 176.

<sup>7</sup> コサックを内側から描こうとする作者の困難と、主体化に向かう登場人物の困難は、ナラトロジー的には当然全く違う次元にあるが、ここではあえて両者を単一の問題として考えてみたい。というのも、自らをコサックとして提示できるかどうかという登場人物にとっての課題は、そのテーマからして、それをどう語るかというナラティヴ（そして作者）の審級における課題に懸かっているからである。

コサックもの小説のパロディの域に達しているという見解もある。<sup>8</sup> そして注意したいのは、そのような野蛮でエキゾチックなコサック像は主に、コサック外部の視点から見られたコサック像だということである。プーシキンの『大尉の娘』やトルストイの『コサック』などで描かれるコサックは、ロシア貴族の目に映るコサックであり、バーベリの『騎兵隊』のコサックは、インテリのユダヤ人から見られたコサックである。これら外部の観察者が一定の内面をもった小説的な主人公であるのに対し、観察されるコサックの側は、読み取られうる内面を必要としない対象となっていると言えるだろう。ゴーゴリの『タラス・ブーリバ』には観察する外的視点は登場人物や語り手としては現れず、主人公はコサック自身であるが、彼らは基本的に内面をもたず（アンドロイの恋愛の場面に若干見られるかもしれないが）、豪胆で残虐というコサック・イメージから生まれ、またそれを新たに生み出しもする、完結した叙事詩的登場人物である。

ショーロホフは『静かなドン』英語版への端書において、「イギリスでこの小説が『エキゾチックな』作品だと受けとめられていることに幾分当惑している」と記した。そして現実が「残酷に」描かれているとしても、それは粉飾でも「残酷なロシア人氣質」によるものでもなく、革命と戦争が引き起こした生と人間心理なのだと強調する。<sup>9</sup> また代表的なショーロホフ研究者であるヘルマン・エルモラーエフは、『タラス・ブーリバ』と『静かなドン』を比べ、前者がコサックの「慣習的イメージ」を提示し、「遠い過去を理想化する」叙事詩であるのに対し、「『静かなドン』は現代の生をまったくリアリティに表象する」と述べる。さらにエルモラーエフは、コサックに対して外在的な思想を介入させるトルストイの『コサック』との比較も行い、「ショーロホフはインサイダーとして、コサックの生そのままの姿に焦点を当てる」と言う。<sup>10</sup> つまり『静かなドン』のコサックは、外部のまなざしによって生み出されたエキゾチックな対象でも、高尚に様式化された形象でもなく、ありのままの姿としてコサック共同体の内側から描かれているということだ。<sup>11</sup>

しかし言うまでもなく、インサイダーとして（つまり自らを）ありのままに描いたり語ったりすることには根本的な矛盾がある。己を観察するためには己の外部に立つ必要があるし、己について語るためには、言語という他者と共有される外在的なものに従う必要があるだろう。だがこのような矛盾の生起こりが主体化という出来事なのであって、それはコサック・アイデンティティの創出される場においても見て取ることができる。

コサックが自らの属する集団について語るためには、自らが一旦その集団の内部にいるというポジションを放棄し、より普遍的な秩序を通過していなければならない。コサック

<sup>8</sup> Judith D. Kornblatt, *The Cossack Hero in Russian Literature: A Study in the Cultural Mythology* (Madison: U of Wisconsin P, 1992), p. 150.

<sup>9</sup> Шолохов М.А. Английским читателям // Соб. соч. в 9 т. М., 2001. Т. 8. С. 214.

<sup>10</sup> Herman Ermolaev, *Mikhail Sholokhov and His Art* (Princeton: Princeton UP, 1982), pp. 99-102.

<sup>11</sup> ショーロホフの両親はコサックではないが、母親がコサックと結婚したことにより法的にはドン・コサックとして生まれ、内戦期もドンで過ごした。こうしたことから、作家はコサックの生活や内戦を直接見聞する機会に恵まれていたと言われる。Ibid., pp. 6-7, 18, 215.

自治運動の過程でコサック・ナラティヴを最も積極的に押し進めたのはコサック社会の上層部だとされるが、彼らはドンを長期間離れることも多く、カデット党员としてドゥーマに参加し、ロシアの国政レベルからコサックを見ていた政治家たちである。彼らはこうしてエキゾチックな存在として外部から見られるだけの対象的地位を放棄し、ロシア国家の統治の観点から語られる言語を獲得することによって、コサックの特殊性を称揚するイデオロギーをつくりあげていった。それゆえ彼らのコサック・ナラティヴはロシア愛国主義と一体化しており、コサックはロシア国家の秩序をもっともよく具現化するものとして語られることになる。

またこうした上層部のナラティヴに対抗するものとして革命期に顕著に見られたのは、共和主義者のナラティヴと呼ばれる立場で、第一次大戦で将校などに昇進した軍人コサックによるこの政治勢力は、コサックが皇帝権力に組み込まれる以前の「自由人」としてのコサック・アイデンティティを支持し、貧しいコサックを代表するとしつつ、ロシア全体と共通するより普遍的な政治組織形態、ソヴィエトや軍事革命委員会などにコサックを組み込んでいく方向を模索していた（エスエル左派に近く、最終的にはボリシェヴィキのイデオロギーに取り込まれていった）<sup>12</sup>。ここでもコサック・アイデンティティは、コサック社会外部の普遍的なものの介入を通してのみ主張されうるものになっていたと言えるだろう。

こうした観点から見て重要なのは、『静かなドン』で前面に出てくるコサックたちが、階級的にエリート層でもなく、明確な政治意識をもった共和主義者とも言えない、一般のコサック大衆であることだ。主人公のグリゴリーは、実在した共和国主義者をモデルにしているとはいえ<sup>13</sup>、「ポジティブな綱領をもたず」「内戦期間中ずっと中立を維持しようとしたドン・コサック中農層」<sup>14</sup>の出身という設定である。『静かなドン』は、国レベルの公的政治のなかではっきり位置取りできないコサック、コサック外部に共通する言語で自らを語ることの難しい一般コサックが、己のコサック・ナラティヴを見つけていく過程を描こうとしているのである。

まずテキストは、一般コサックが己のコサック性を自ら発見することはないということをはっきり示している。それが象徴的に語られるのは、コサック部落の平和で自足的な生活のなかに「よその人間 *чужой человек*」<sup>15</sup>、つまり外部が侵入してくるシーンである。この「よその人間」とは、シュトックマンというドイツ語風の名をもつ男で、鍛冶屋と称して部落に住み着くが、徐々に彼がボリシェヴィキから派遣されたアジテーターであることが判明していく。シュトックマンのもとに若く貧しいコサックたちが集まりはじめると、

<sup>12</sup> Holquist, *op. cit.*, pp. 64-65; Kenez, *op. cit.*, p. 168.

<sup>13</sup> Кузнецов Ф. «Тихий Дон»: судьба и правда великого романа. М., 2005. С. 497.

<sup>14</sup> Венков А.В. Донское казачество в гражданской войне (1918-1920). Ростов-на-Дону, 1992. С. 20, 7.

<sup>15</sup> Шолохов М.А. Тихий Дон // Соб. соч. в 9 т. Т. 1-4. М., 2001. Т. 1. С. 117. 以下、同書からの引用は（巻数:頁数）で本文中に記す。

彼は詩集などと一緒に『ドン・コサック小史』を読ませ、彼らにツァーリ体制に対する反感を植え付けていくのである(1:137)。コサック大衆がコサックについての書物を読み、自らの置かれた状況について理解していくという反省的次元は、こうしてコサック外部の視点によって初めてもたらされる。

ところでこのシュトックマンのエピソードの構図、つまり外部の介入によって無意識的な自然状態から意識的な状態へ移行するという物語は、ポリシェヴィキによって定式化され、クラークが社会主義リアリズム小説に共通するプロットとして見いだした啓蒙の図式である。<sup>16</sup> そこでは、自らの社会的位置づけを自覚したプロレタリアートが革命の主体になっていくという図式が提示されているのだが、これはコサックのようにエキゾチックな対象としてしか表象されなかった存在が主体として語るようになるかどうかという、植民地主義にまつわる問題構成と相同的な図式と見ることもできるだろう。たとえばシュトックマンの教えを受けたコサック、イワン・コトリャーロフは、

これまでに味わったことのない大きな熱い愛とともにある人物を思い出していた。彼はその人の指導のもとで自分の険しい道を探り出してきたのである。明日コサックたちに話さねばならないことを考えながら、彼はシュトックマンがコサックについて語った言葉を思い出した。シュトックマンはその言葉を、まるで帽子の上から釘でも打ち込むようにしょっちゅう繰り返したものだ。「コサックは本質的に保守的だ。おまえがコサックにポリシェヴィキ思想の正しさを納得させるためには、この事情を忘れるな」。(2:115)

貧しいコサックであるコトリャーロフは、革命主体としての覚醒を促される同時に、自らもその一員であるコサックがどのようなものか自覚させられるが(興味深いことに、このときコトリャーロフ自身はあたかもコサックではないかのように描かれているが、これが主体化という出来事を語るときに必要とされる外部性を示す徴なのだと言えよう)、両者の一致はもちろん偶然ではない。革命期ロシアにおける大衆動員という要請のもとでは、この二つの意識化は同時生起するほかない出来事だった。ロシア帝国内で隷属的な地位におかれていた非ロシア民族のナショナリストたちは、帝政が崩壊したこの機会に民族自治の可能性を求めて革命側につき、一般大衆のあいだにも民族主義的気運を浸透させようとした。一方ポリシェヴィキの側も、諸民族が従属してきた旧体制を転覆させて自らのイデオロギーを根づかせるために、抑えられていた民族アイデンティティの意識化を図っていくことになる。

だがコサックに関しては、コサック主体への覚醒と革命主体への覚醒とは簡単に一致しない。というのもコサックはケネスの述べるように一つの固有な民族ではないからだ。<sup>17</sup> 民族的にはロシア人と同じとされ、シュトックマンが言うように保守的で権力に絶

---

<sup>16</sup> Clark, *op. cit.*, pp. 15-24.

<sup>17</sup> しかしこの時期のコサックは一個の民族としての自治を主張し、ときにはコサック外部

対的に服属する国家主義者ともみなされながらも、「自由の民」「反逆の徒」というアナーキズムのイメージをもつという、抑圧／非抑圧という対立図式ではわりきれない中途半端かつ両極端な社会的位置づけにあったのが、コサックという特殊な集団である。『静かなドン』の歴史物語全体を通じての主題はまさに、この分裂したコサック概念に向けての主体化と革命的な主体化との交錯と不一致なのだ。

シュトックマンに煽動された貧しいコサックたちは、社会主義リアリズム小説の定式通りに圧倒的な外部の力（ポリシェヴィキ・イデオロギー）によって確実に革命主体へと目覚め、赤軍に入隊して死んだり社会主義建設に邁進したりするが、コサック成員みなが彼らのように素直にイデオロギーを受け入れ、順調に肯定的主人公へと育っていくわけではない。ポリシェヴィキのイデオロギーを最初から受け入れないコサックや反発するコサックといった、ソ連体制に対するあからさまな敵だけでなく、外的な思想の受け入れに迷うコサックが現れ、むしろこうした迷えるコサックのほうが、中心的主人公となっていくのである。「迷い」「揺れ」は、主人公グリゴリーの人生を最も簡潔に特徴づける言葉であり、彼のコサックとしての主体化とも大きく関わる問題となるだろう。<sup>18</sup>

#### 4. グリゴリーの「迷い」

第一次大戦に従軍して負傷したグリゴリーは、病院でウクライナのコミュニスト、ガラランジャと知り合い、彼にポリシェヴィキ思想を吹き込まれる。「グリゴリーは、それまで抱いていた皇帝や祖国やコサックの軍務についてのあらゆる概念が、賢く辛辣なウクライナ人によってしだいに確実に破壊されていくのを、恐怖とともに意識していた」(1:314)。しかし戦功を収めて家に帰ると、人々の「追従や敬意や感嘆などが入り交じったこの複雑で微妙な毒全体は、ガラランジャが彼のなかに撒いた真理の種子を意識から一掃し、だめにしてしまった。[...]母の乳と一緒に吸収し、これまでの人生によって育まれてきた己のコサック的なものが、偉大な人間の真実 [=コミュニズム] を上回った」(2:39) と語られ、グリゴリーは「善良なコサックとして戦線に戻り [...] 自分のコサックとしての名誉を忠実に守った」(2:39) という記述が続く。ここでコミュニズムに対置されるコサック的なものと

---

からも民族として扱われることで、分離主義を一層押し進めた。たとえば1918年春、ドイツ軍侵攻の危機にあったソヴィエト政権は、ドンを防御壁とするために「ドン・ソヴィエト共和国」の成立を認め、コサックを「民族グループ」として自由に発展させることを定めた。Kenez, *op. cit.*, p. 170. Венков. Донское казачество в гражданской войне. С. 23-24.

<sup>18</sup> 「内戦全体が〔コサックの〕「6割」を占める中農の苦しみに満ちた揺れなのだ」(Венков А.В. Печать сурового исхода. К истории событий 1919 года на Верхнем Дону. Ростов-на-Дону, 1988. С. 20.) と定義する А. ヴェンコフは、中農コサックの揺れ、中立、非政治性を経済・政治・軍事的な観点から緻密に根拠づけている。Венков. Печать сурового исхода; Венков. Донское казачество в гражданской войне (1918-1920)を参照。本稿ではそうした側面はひとまず措き、この「苦しみに満ちた揺れ」が『静かなドン』という文学テクストにおいてどう提示されるかを見ていく。

は、グリゴリーが自覚的・意識的に獲得したアイデンティティというよりは、社会や文化が無意識的に養ってきたものである。そしてそのような彼の無意識のコサック性は、具体的に描かれる段になると、ステレオタイプ的なイメージに従属することとなる。「グリゴリーはコサックの榮譽を固く守って、ひたむきな勇敢さを発揮する機会を捉え、危険を冒し、無鉄砲に振る舞った。[...] コサックは曲乗りをやっていたのである」(2:42)。こうした記述は、グリゴリーをエキゾチックな対象として描き出している、あるいは彼自身がいまだ主体化されていないことを描き出しているのだと言えるだろう。

この後グリゴリーは熱狂的なコサック自治主義者である将校イズヴァーリンと知り合い、「最近までしっかりしていた足下の地盤が再び揺り動かされるのを感じ、かつて [...] ガランジャと出会ったときと同じようことを味わった」(2:160)。

しかしまたその直後に「グリゴリーは偶然、ドンの革命史において少なからぬ役割を演じたコサック [...] フォードル・ポドチョールコフ [共和主義者の一人] と出会い、いくらか動揺したのち、再び以前の真実が彼の心のなかで優勢を占めた」(2:161)。こうして彼は赤軍部隊に加わるが、ポドチョールコフの捕虜の扱いの残酷さなどに疑問を抱き、再び迷いはじめる。

彼の背後にあったものはすべてこんがらがって矛盾していた。正しい道を手探りしていくのは難しかった。ぬかるんだ丸太道のように足元の地盤がぐにゃぐにゃした。そして行くべき道を進んでいるのかどうか自信がなかった。ポリシェヴィキに引き寄せられそっちに行った。他の者を従えて進んだ。しかしその後思い迷って心が冷めた。[...] 「誰に寄りかかるべきなのだろうか」。(2:218)

こうして迷っている間に赤軍がコサック部落に侵入すると、グリゴリーも赤軍との闘いに動員され、成り行き上、今度は反ソヴィエト政権の側につくことになる。このときコサック中隊を率いることになった兄は、グリゴリーを案じてこう警告する。「おまえが赤に寝返るんじゃないかと恐れてるんだ……グリシャートカ、おまえはいまだに自分を見つけだしてないんだよ [...] おれはな、グリーシュカ、おまえみたいにふらふらしないぞ [...] コサックがやつら [=赤軍] に反対だからおれも反対ということだ [...] やつらのほうに寝返らないだろうな？」これに対しグリゴリーは「たぶんね……わからんよ」(3:20) と答える。

このように、グリゴリーが出会うさまざまなイデオログがそれぞれ確固とした政治的立場に立っているのに対し、グリゴリーは彼らのあいだを渡り歩くだけで、結局どのような思想にも同一化することができない。そして「コサックが反対だからおれも反対」とコサック全体の動きに同調する兄に対し、グリゴリーは「部落と道を分かってしまった」(2:156) と語られるように、迷うことによってコサック全体の動きから離れていくようだ。グリゴリーは、政治的にだけでなく、この小説のもう一つの中心的なプロットである恋愛



においても不倫をして部落を出て行くことで、すでにコサック共同体の秩序から逸脱していた。<sup>19</sup>

## 5. グリゴリーの「迷い」＝コサックの「迷い」 —否定としてのコサック・ナラティヴ

しかしこのように迷いコサック集団から離れていったグリゴリーを、シュトックマンの弟子たちは次のように非難する。

「おまえはおれたちの頭を混乱させに来たんだな、グリゴリー！ 自分でも自分がどうしたかわからないくせに」。「わからないね」グリゴリーは自ら進んで認めた。[…]「コサックをぐらつかせる必要などない、それでなくともやつらはぐらついているんだから」。(3:125, 127)

こう語られるように、迷っているのはグリゴリーだけでなく、実はコサック全体なのであり、グリゴリーはそのようなコサック集団全体の迷いをつねに先取りして、集団から逸脱することによって集団全体の動きを代表し、ある意味コサックの動揺を導いている。十月革命が起こったとき、「コサックは動揺した」(2:142)「コサックは決断できず、ためらいをみせた」(2:143)と語られるが、この「動揺する」「ためらう」という言葉、またそれに類する言葉は、その後も様々な政治的変動に直面したコサック集団を形容するものとして繰り返し現れる。<sup>20</sup>

こうして革命期に活発化する大衆政治において、外部から押しつけられる思想を一旦は受け入れながらも、結局そのどれにも反発してしまうこと自体が、一般コサックのコサック性として徐々にテキストに現れていく。

コサックたちは、シベリアやクバンにおけるカデットの成功についての報道も信じなかった。『上ドン地方』紙はたいそう恥知らずに厚かましい嘘をついていた。[…]コサックのオフヴァートキンは、チェコスロヴァキアの反乱記事を読んで、グリゴリーのいる前でこう述べた。「今チェコ人が圧迫されてるが、次はこっちにありったけの軍隊を押しつけてくるぞ、あっちでもすごかったんだから、おれたちからもどろどろしたものが流れ出すだろうよ……要するにラセヤ[ロシア]だからな！」[…]グリゴリーはタバコを巻きながら、ひそかに底意地悪く独り決めた。「そのとおりだ！」。

その夜グリゴリーは長いことテーブルに向かっていた。[…]張りつめ、いつになく頭を振り

<sup>19</sup> この点については、拙稿「ショーロホフ『静かなドン』におけるジェンダー／セクシュアリティ—根絶される女性の身体について—」『ロシア語ロシア文学研究』第38号、2006年、27-28頁を参照。

<sup>20</sup> 拙稿「社会主義リアリズムとショーロホフ『静かなドン』 自然としてのコサック」『世界文学』第100号、2004年、36-38頁を参照。

しばって考えていた。そしてもう横になってから、一般的な問題に答えるかのようにこう言った。「どこにもつきようがないんだ！」(3:75)。

グリゴリーに代表される一般コサックは、このように既成の政治的立場を拒絶するという否定的身振り、「わからない」「どこにもつきようがない」という否定性を自らのコサック・アイデンティティとして作りあげ、コサックとして主体化していく。コミュニストにもならず、エリート・コサック層の作りあげる保守的なコサック・アイデンティティに同一化することもなく、共和主義者のコサック・アイデンティティにも一致できず、そのような公的な政治言説領域のどこにも固定されえないものであること自体が、グリゴリー個人の問題ではなく「一般的な問題」(3:75)、一つのコサック・ナラティブとしてテキストに浮かび上がってくるのである。自分の属する部落や軍隊に密着し、戦功によって地位を築いていくというグリゴリーの経歴は共和主義者の特徴と言えるものだが、小説の登場人物である彼が傑出したコサック闘士、優秀な指揮官としてコサック共同体のなかで名を上げていくのは、政治的な領域における代表者・政治的主体になっていくためではない。グリゴリーの位置によってどのイデオロギーとも一致せず、政治的な領域に加われない、あるいは加わることを欲しない大衆コサックの位置が文学的に代理表象されるのだ。

このグリゴリーの立ち位置の矛盾は、彼の人物像によく現れている。彼はコサック的な勇敢さを発揮する一方で、レイプや略奪、リンチといったコサックの集団的な暴力性が発揮されるシーンには加わらないことがほとんどで、たとえば略奪を奨励する兄と異なり、「グリゴリーの目には自分のコサックたちの略奪は特に不愉快なもの映った」(2:69) ため、彼は略奪を禁じ、そのせいで軍隊での地位を降格され、父親からも非難される。コサック共同体の掟に違和感を抱き、集団にうまく収まりきらないグリゴリーは、こうして悩める主人公として現れる。それによって彼はコサック集団と距離をとり、野蛮でエキゾチックな他者としてのコサック・イメージに亀裂を入れることを可能にし、読者が共感し同一化できるようなコサックの人物像を担うようになっていく。典型的なコサック・イメージ、エキゾチックな対象としての地位を抜け出すことにより、グリゴリーは近代的な迷える主体、個人主義的に行動する教養小説の主人公として捉えられるようになっていく。<sup>21</sup>

ただし、グリゴリーは西洋の小説におけるような近代的な問題含みの主人公となっているわけではない。コサックらしさを捨てることによって成し遂げられる彼の主体化は、一見コサック共同体と矛盾するかのようだが、先に示したように、彼の「迷い」は、実はコサック共同体の動きを体現するものであった。だからグリゴリーの吐露する言葉は、恋愛の問題を除き、彼一人に固有の悩みから出てくるものではない。グリゴリーの内的独白はすべて、同時にコサック共同体全体が共有すべき言葉なのであり（実際、上に引いた彼の迷いを表すいくつかの箇所をコサック全体の迷いに置き換えて読んでみても、不整合は生じないだろう）、近代小説に見られるような個人の内面とその外部の共同体との齟齬という

---

<sup>21</sup> Stewart, *op. cit.*, p. 74.

ものは、ねじれたかたちで消去されていると言える。「近代小説の個人的な主人公たちの洗練された思考や価値観をグリゴリーに求めるのは間違いというものだろう。『静かなドン』が叙事詩的小説であるのと同様に、彼は叙事詩的主人公なのだ」<sup>22</sup>。

しかし本稿第1章で述べたように、『静かなドン』は単なるコサック叙事詩ではない。コサック共同体の価値体系は、もう一つの叙事詩的価値体系、社会主義リアリズムの制度と共存している。そして両者の価値体系の不一致ゆえに、グリゴリーの独白、つまりコサック共同体の独白は、コサック固有の悩み、コサック共同体とその外部世界との完全な不調和、衝突を表現する言葉となるだろう。この社会主義リアリズム叙事詩の枠組みにおける肯定的主人公（あるいは肯定的主人公となるべき人物たち）はボリシェヴィキだが、『静かなドン』のテキストにおいて、彼らは中心的プロットに対し周縁化されている。中心はあくまでも、模範的なボリシェヴィキすなわち肯定的主人公になりえないコサックであり、グリゴリーを代表とする彼らコサックはその全体が、社会主義リアリズム叙事詩にとっての問題含みの主人公なのである。そして通常社会主義リアリズム小説と異なり（そもそも定義上、叙事詩に問題含みの主人公はありえないのだが）、このように模範的になれない者たちであるにもかかわらず、迷えるコサック集団は小説テキストにおいて決して敵となることはなく、読者はグリゴリーを介して彼らに同情し、ともに迷うことができる。

そのような意味で『静かなドン』は単なるコサック叙事詩でも社会主義リアリズム叙事詩でもない。二重の叙事詩は、その不一致により、自らのなかに叙事詩外的な要素、主体化に向かうコサックという問題含みの主人公を引き入れ、それを中心に据えることによって、「古代の形式の反復」たる社会主義リアリズムを超えるテキストとなる。それは、第一次大戦によって引き起こされた大衆動員、それに促された大衆の政治参加、封建的な帝政の崩壊などによって、コサック集団が突然に己の近代化・主体化に直面し、国家という「外部」との軋轢を経験することになったところから生じた、近代的な問題構成を内包した小説テキストであり、一つの集団を問題含みの個として語る小説テキストなのである。

## 6. 「民族」「獣」としてのコサックの誕生とその解体

ではこのような迷える主体としてのコサックは、小説テキストにおいて結局どこに行き着くのだろうか。困難をともないつつ為されるコサックの主体化は、どのような帰結を準備するのだろうか。この最後の章では、歴史的経緯を参照しつつ、ドン・コサックが辿っていく道程とその終着点が小説のなかでどのように位置づけられるのかを考えてみたい。

ボリシェヴィキ革命・内戦の進展は、赤か白かの二者択一をすべての者に強いるようになるが、両者のあいだを揺れ動く一般コサックは「どこにもつきようがない」(3:75) 存在となっていく。グリゴリーのモデルの一人ともされる共和主義者フィリップ・ミローノフ

---

<sup>22</sup> E. J. Simmons, *Russian Fiction and Soviet Ideology: Introduction to Fedin, Leonov, and Sholokhov*. (N.Y.: Columbia UP, 1958), p. 186.

に関する資料の編者は、ミローノフの革命初期の言葉を次のようにまとめている。「『ボリシェヴィキと保守勢力は同盟者だ』。なぜなら両者はお互いどうしに不寛容だけでなく、彼らと同意しないみなに対して不寛容だからだ。ボリシェヴィキは『ロシア全体にとって』恐ろしい。だが同時に彼らはカデットの『不自然な』同盟者である。というのもカデットは『今やボリシェヴィズムを通して』『民衆の勝利に対する攻撃を行おうとしているからだ』<sup>23</sup>。つまり一般コサックが革命側につくと、反革命のコサック支配層は彼らがボリシェヴィズムに寝返ったとして攻撃する。また逆に一般コサックがコサック支配層に強制動員されると、ボリシェヴィキは彼らを反革命コサックとして攻撃する。こうして一般コサックは、コサックであるというアイデンティティを保持すること自体によって、どちらについても反対陣営からの攻撃にさらされることとなった。

白軍で闘っていたグリゴリーらのようなドン北部のコサックは、長期化する戦争に疲れて白軍の戦線を捨て赤軍を通過させる。だがドンの地に赤軍が流れ込むと、ソヴィエト政権は、赤軍のために戦線を開けたまさにそのコサックたちへの締めつけを強化していく。これが、ソヴィエト政権が主導した「コサック解体 *расказачивание*」政策と呼ばれるものだ。「解体」と訳すと、コサック集団という行政上の制度を壊すという含意が強く、実際にそのような意味でもこの言葉は使われたが（その場合は、兵役から解放されたいコサック自身が積極的にこの政策を支持することもあった<sup>24</sup>）、この時期のコサック解体は主に、より物理的な介入を指す。馬車や馬具、干し草の押収、武装解除などが行われただけでなく、小説でもある程度描かれているように、反革命的あるいは富裕層のコサックは逮捕・銃殺され、ドン地方で1万から1万2千人のコサックが犠牲となったとされる。

このような直接的暴力による住民統治を行ったのはソヴィエト政権に限ったことではなく、白軍にも一定の集団全体に対する暴力行使が見られた。ピーター・ホルクイストによれば、それは赤白両者が互いに報復措置として行ったものというよりは、第一次大戦からヨーロッパ全域で見られるようになった、戦争暴力を住民全体に振り向けるという現象であり、ロシア内戦におけるコサック解体は、この戦争暴力が外国との戦争ではなく国内政策に転じたものなのだという。その後もソヴィエト政権下では、特定住民全体に対する無差別的な暴力行使が続くことになる。<sup>25</sup>

赤と白という陣営が互いに行使する暴力はしかしなぜ、赤でも白でもないコサックという別のカテゴリーに振り向けられることになるのだろうか。コサック内部には革命派も反革命派もあり、そうした基準によって暴力が配分されることもありえたはずだが、コサック解体政策は一時的にはあれ、政治的・階級的立場にほとんど関係なくコサック全体を無差別テロルの対象とした。<sup>26</sup>

<sup>23</sup> Данилов В., Тархова Н. и др. (сост.) Филипп Миронов. Тихий Дон в 1917-1921 гг. М., 1997. С. 10. 『』内はミローノフの言葉。

<sup>24</sup> Филипп Миронов. Указ. соч. С. 12.

<sup>25</sup> Holquist, *op. cit.*, pp. 202-205.

<sup>26</sup> ソヴィエト政権の指令によるこのテロルは階級的アプローチに違反するものであった

この物理的解体があった数ヶ月後、ミローノフはこう書いている。「[...] 私はコサックのためではなく最良の人類のためにクラスノフの一味〔反革命のコサック軍団〕と闘ってきた。だが彼らはコサックを人類の一部とみなしたくはないようだ。だから私の熱意も余計なものとなった [...]」<sup>27</sup>。ここでは、どんな政治的立場をとる者であれ、「コサック」のアイデンティティを付帯する限り、その人間は「コサック」という一つの分割不可能なシニフィアンとともに他者に表象されるということが語られている。革命・内戦を通してコサックは、赤と白の分割によっては割り切れない余り、「還元不能に『コサック』であるような『住民』や『要素』」<sup>28</sup>として扱われていったのである。

そして、そのような割り切れないシニフィアンとしての「コサック」を生み出したのは、革命期の諸々のコサック・ナラティヴにほかならない。たとえそのナラティヴが多様であり、ときには対極的な諸立場が含まれていたとしても、それらが単一のコサック・アイデンティティを保持するものであれば、異なる立場の者も同じアイデンティティ集団の一員とみなされてしまう。こうしてソヴィエト政権が確立したドンでは、コサックは自動的にみな反革命勢力であるというレッテルによってテロルの対象となった（それは、白軍地域となっていたときに成年男子コサックがほぼみな強制動員され、親ソヴィエト的な部落さえ反革命側に加わらねばならなかったからでもある）<sup>29</sup>。

ソヴィエト政権が部落に打ち立てられると、グリゴリーは革命委員となったイワン・コトリャーロフらと対立を深め、部落から逃亡する。しかし彼は単にソヴィエト政権に反対するわけではない。

「人生に一つの真実しかないってわけじゃない。弱肉強食の世界だ……。なのにおれはしょうもない真実を探していた。心が病んであっちこっちに揺れた……。昔はタタール人がドンを侮辱して土地を奪い迫害したと聞くが、今度はルーシか。いやだ！ 我慢しないぞ！ やつらはおれにとってもコサック全体にとっても他人だ。コサックたちも今は気づいている」。 (3:128)

グリゴリーにとって、すべての外的・政治的イデオロギーの拒否は同時にロシアの拒否を意味している。コサック軍団政府はコルニーロフら中央の反革命勢力をドンに招き入れ、それに対抗するポリシェヴィキも中央からドン地方にやってくる。こうして、政治のことは何もわからないがロシアには反対だとして、コサック／ロシアという対立軸を設け

---

という一般化した見解に対し、相対的に階層分化の進んでいなかったコサック集団内の分化を促すためのテロルであったという意見もある。*Венков. Донское казачество в гражданской войне. С. 83.* しかしその場合でも、階級や政治的立場ではなく社会集団・身分が対象となったことには変わりない。

<sup>27</sup> Филипп Миронов. Указ. соч. С. 190.

<sup>28</sup> Holquist, *op. cit.*, p. 176.

<sup>29</sup> Holquist, *op. cit.*, pp. 150-165; *Венков. Донское казачество в гражданской войне. С. 70.* 一方、赤軍に入ったコサックはもはやコサックとはみなされなくなった。*Венков. Донское казачество в гражданской войне. С. 103.*

る一般コサックのナラティヴは、赤軍占領地域で起こるコサック反乱において頂点に達し、武力となって現れる。革命委員会に追われる身となり、しばらく隠れていたグリゴリーは、反乱の報を耳にすると、

思わず喉から軋るような激しいかすれ声がほとぼしかったほど獐猛で巨大な喜びを感じ、力と決断力がみなぎるのを感じた。[...] 獣のごとく乾糞のつまった獣穴に隠れ、外から聞こえるあらゆる物音や声に対して獣のように警戒していたやりきれない数日のあいだに、すべてが吟味され、決定されたのである。まるで真実を探求した日々や、動揺や、転向や、内心の苦しい闘いなど背後になかったかのようにであった。[...] コサックの道と土地をもたない百姓のルーシの道、工場で働く人々の道とが交錯したのだ。彼らと死ぬ気で闘わねばならない。コサックの血が流された肥沃なドンの地を彼らの足下から奪い取らねばならない。(3:154-155)

グリゴリーを獣として対象化する語りから、彼の心内語に徐々に移行していくこのテキストにおいて、コサックは迷いなどもたない獐猛な動物のようにロシアに対して立ち上がっていく。

小説におけるこのような反乱描写に対し、実際のソヴィエト政権側のコサック解体政策の通知文書も、「コサックを全く違う種として」描き、「コサックはなんらかの動物的世界の見本とたいへん似かよった心理をしている」と伝えた<sup>30</sup>（ミローノフの「彼らはコサックを人類の一部とみなしたくはない」という表現も参照）。そして「一旦コサックが民族的・疑似生物学的な『要素』を意味するようになると、反革命的な執拗さをもったコサック性は、もはやコサックをめぐる諸条件を変えるだけでは根絶できないものとなった。そして法的存在の消去に取ってかわり、物理的絶滅がコサックの要素の反革命的な性質に対処する唯一の解決法となったのである」<sup>31</sup>。

小説においても同様に、コサック解体政策の対象となる側のグリゴリーが自らをコサックとして意識化する場面には、民族的・疑似生物学的な色彩がほどこされていると言えるだろう。コサックはルーシやタタール人と対置されチェコ人と同じ平面に置かれることによって民族化され（3:75）、またグリゴリーは獣のように描かれることで自然化され、人間と異なる種であるかのように語られる。<sup>32</sup> このように迷いを捨て決断した獣のような姿が

<sup>30</sup> Peter Holquist, "Conduct Merciless Mass Terror," in *Cahiers du Monde russe*. 38(1-2), 1997, p. 132; Венков. Печать сурового исхода. С. 67-68.

<sup>31</sup> Holquist, "Conduct Merciless Mass Terror," p. 132. 還元不能な余りとしてのコサックの物理的身体に加えられる攻撃は、小説テキストにおいては主にコサック社会の女性の身体に移動されている。この問題については、拙稿「ショーロホフ『静かなドン』におけるジェンダー／セクシュアリティ」、29-32頁を参照。

<sup>32</sup> 『静かなドン』の発表当時、小説がコサックを民族として描いているかどうか議論の焦点の一つとなった。ある歴史家は、「ショーロホフは小説『静かなドン』においてコサックを一個の民族として根拠づけようとしている」「ショーロホフの視点から見て民族的であるものは、階級への帰属に関係なくすべての者を統合してしまう」、「生物学的な真実が勝

グリゴリーのコサックとしての主体化の最終局面だが、ここに見られるのはエキゾチックな対象であると同時にコサック解体政策の対象としてのコサックであり、それはすでに、なんらかの選択可能性を持った主体と言えるものではない。

こうしたことを通して小説テキストから読み取れるのは、グリゴリーらコサック大衆の、コサック主体への覚醒という物語（コサック・ナラティヴ）は、コサックが絶滅政策の対象となることを可能にする前提条件を提供しているということだ。だから、この小説においてグリゴリーが迷える主人公でありかつ立派なコサック闘士へと成長していくことは同時に、彼の脱コサック化（＝コサック解体 decossackization）へと向かうことなのであり、彼はコサックをやめることに向かつてコサックへと創造されていく。あるいはこの小説がコサック解体という歴史的出来事を記したテキストなのだとしたら、これはコサック解体によって生み出されたコサック創造のテキストだとも言えよう。

こうしてコサック叙事詩（コサックの破滅という悲劇の物語）と社会主義リアリズム叙事詩（ソヴィエト政権によるコサックの征服）とは、対立しつつもテキストの結末において一致する。しかし、コサックの破滅とソヴィエト政権の勝利は同じ一つの出来事としてテキストに書き込まれているのではあるが、それらは単なる互いの裏面、赤と白、必然的な勝者と敗者の物語になっているわけではない。『静かなドン』のコサックが、一方的にソヴィエト体制の勝利を謳う社会主義リアリズム叙事詩にとっての都合のよい被征服者になっていないのは、それが、困難な主体化に向けての過程をとおり、革命と反革命、赤と白というクリアな分割に服しえない要素として現れるからだ。グリゴリーに代表されるコサックは、最初から征服されるべく運命づけられた敵として登場するのではなく、物語の進展のなかでいくつもの選択肢を手にした迷える問題含みの主人公へと成長し、小説の後半ではそうした選択肢が次第に狭まって最終的に避けがたいものとしての決着を迎え

---

利をおさめている」と述べ、小説における階級分析の欠如を非難した。Янчевский Н.Л. Реакционная романтика// На подъеме, № 12, 1930. С. 134, 139, 153. これに対し別の批評家は、「コサックが民族であることを裏づけるような説得力のある事実を『静かなドン』のなかに見つけられる読者は一人もないだろう」、ショーロホフは「民族的特殊性という幻想を検討しようとするわけでも裏付けようとするわけでもない。彼はこの幻想をある現実的な前提として受け取っているのであり、そこに彼の過ちがあるのだ」と論じた。Мазнин Д. Об идее «Тихого Дона» и левом загибе т. Янчевского// На подъеме, № 12, 1930. С. 172. 他の発言も含めた議論全体は Дискуссия о «Тихом Доне» // На подъеме, № 12, 1930. С. 129-182.

また小説発表時の雑誌掲載版ではコサックを「民族」とする以下のような記述が見られるが（本稿第4章で引用した箇所）、この「民族的なもの」の一語はのちに削除された。「母の乳と一緒に吸収し、これまでの人生によって育まれてきた己のコサック的なもの、民族的なもの Свое, казачье, национальное が、偉大な人間の真実 [=コミュニズム] を上回った」 Шолохов Мих. Тихий Дон (продолжение). Часть четвертая // Октябрь, № 5, 1928. С. 139. 他にも национальный дух が казачьй дух に、казак-националист が казак-автономист に変更されたこと（主に1933年版から）などについて、Ермолаев Г. «Тихий Дон» и политическая цензура 1928-1991. М., 2005. С. 154-155 を参照。

る。<sup>33</sup> この小説におけるコサックの主体化のナラティブは、コサックに決定する主体の自由を与え、赤にも白にもさせないのと同時に、まさにそのことによって、赤と白のどちらにも収まりきらないがゆえに消去されるべき余り、解体の対象をつくり出すのである。

コサックの主体化に向けての物語は最終的に、閉じているべきコサック叙事詩の価値体系に穴を穿つ。コサック叙事詩は悲劇を完結させるものの、それは小説テキストにおいて独立した物語としては存在しない。コサックの主体化の物語を内包したこの悲劇の結末は、ソヴィエト政権によるコサックの征服というもう一つの物語(社会主義リアリズム叙事詩)に支えられているからだ。一方、その社会主義リアリズム叙事詩のほうも、赤軍の勝利により物語を完結させているはずだが、それは自足的な完結というにはほど遠く、悲劇的なコサック叙事詩を通してのみ与えられるものとなっている。コサックの主体化という物語をとおして結びつけられるこの二つの叙事詩の非完結性こそが、『静かなドン』を社会主義リアリズムにおける「例外」にしているのではないだろうか。<sup>34</sup>

---

<sup>33</sup> そうした点においてこの小説テキストのナラティブは、「すべての反乱や動揺において別の道や別の結末はありえなかったことがわかってきたのだ」というヴェンコフの政治・経済的な運命論と大きく異なっている。Венков. Печать сурового исхода. С. 64.

<sup>34</sup> 本稿は平成 18 年度科学研究費補助金の助成による研究成果の一部である（課題番号 17・305）。